

ラオスの伝統織物とその生産

—村社会の中で生産されるタイドン族の白綿布—

前川 佐知

The Production of Traditional Textiles in Lao P.D.R.: The Purpose of Producing White Cotton Textiles in the Village Community of Tai Don

Sachi MAEGAWA

Women of Tai Don, a group of ethnic minorities that live in the Northern Lao, have been producing handmade textiles in spite of the having a sufficient amount of products in their market. This is because their unbleached white cotton textiles are essential for their ceremonial occasions, religious service and daily lives. The textiles are considered as tools to measure the weaver's character and the legacy to her descendants. In the village, the amount of unbleached white cotton textiles woven by each women represents her integrity and diligence. The larger the amount of textile a woman weaves, the more respect she will gain, and vice versa. Therefore, to keep the villagers from talking bad about her Tai Don women try to weave the textiles as much as possible. These textiles are also used as gifts to the weavers' family at weddings or funeral ceremonies. By giving these self-made textiles to others, the weavers pass their legacy on to their future generations. This paper focuses on the details of the Tai Don women's purposes of weaving and the meaning of their traditional textiles.

ラオス人民民主共和国（以下ラオス）の北部に暮らすタイドン族の女性は、日常生活に必要な布を織り続けている。ラオスが発展途上国であることを考えれば、自給自足の生活は何ら矛盾のないことのように思われるが、そうではない。なぜ

なら、彼女達の住むその村は国道沿いにあり、多くの情報や経済と交わる機会の多い環境にあるからだ。

筆者は 2004 年から現在に至るまで、毎年 1 年のうちの半年程度をラオスで過ごし、地方の村々をまわり染織の現状を調査してきた。

現在ラオスには 49 の少数民族が存在するとされ、各民族の様々な染織技法を用いて織られた布を見ることができる。そしてその布のほとんどが工房や工場で生産されているのではなく、日常生活の一部として一般家庭の中で生産されている。

その姿は一見、自給自足の生活の中、民族に伝わる伝統織物を家族のために織り続けているように見えるのだが、その生産目的は環境によって異なる。県都や郡都、道沿いなどの、より経済活動が活発となる機会の多い地域では、収入を得るための「販売」を目的とした布の生産が行われることが多い。またその場合、伝統織物ではなく、市場の要求に従い流行の布が織られている。従ってこのような地域では収入を得ることが主目的であるため、他に効率良く収入を得る手段を持つようになると多くの人が布の生産をやめてしまう。

それに対し、主要道路から離れた僻地など、より経済活動から疎遠となる地域では、販売を目的としない「自家消費」のための布や、民族意識を維持するための布の生産が行われている。

本調査の対象地であるタイドン族の村は、主要道路沿いにあるばかりか、郡都から約 9km しか離れていない上、農作物の販売などにより常に現金収入を得ている村である。

そのような生活環境にありながら、村の女性達は布を販売することも購入することもなく、「自家消費」のための布を織り続けている。しかもその原材料となる綿花の栽培から行っているのである。

なぜそのような布生産が行われているのだろうか。

本論ではタイドン族の布生産を通じて、「自家消費」の布生産が担う真の目的や意味を考察し、伝統織物とは何かを探りたい。

1. 調査地の概要

ラオス北部に位置するタイドン族の村には、村人の共通認識として 1886 年にベトナムから移動し定住したという歴史がある。当時移住したのは 15 家族のみであったが、現在はこの村を含む 3 村にまで拡大している。また、この 3 村は隣接しており、周りを他民族に囲まれた、ひとつの民族集団である。

以前は村の北側に位置する川が水路として交通を担っていたが、1970～1973 年に中国によって村を通る道路が建設され、現在も県の主要道路として使用されている。

村人の生業は、主に農業（米・飼料用作物の生産販売）である。

焼畑による綿花栽培が行われており、綿繰り、綿打ち、糸紡ぎ、糊付け、整経、機織り、すべての工程を一人の女性、もしくはひとつの家族によって行われている。また、焼畑を行う際に山の木を伐りだすために使用する鉋をはじめ、糸車や織機など布生産に使われるすべての道具が村内で自給されている。

生産されている布は主に白綿布¹であり、その布を藍で染めたものを寝具、頭布やおんぶ紐といった生活用品に作り変えて使用する。

2. 調査期間と調査対象

調査期間は 2012 年 4 月 2 日～24 日である²。

調査対象者は布生産に従事する女性（男性は焼畑の準備や種蒔き、糊付けなどの力仕事にしか関わることはない）である。

【村内戸数:189 戸 人口:966 人（男性 520 人 女性 446 人） 2012 年 4 月時点】

3. 調査内容

村内 189 戸中 70 戸（70 名）にて聞き取り調査を行った。調査内容は多岐に渡るが本論では次の 6 項目を扱う。

- ・年齢
- ・糸紡ぎを始めた年齢
- ・織りを始めた年齢
- ・白綿布の保有量
- ・既製服を着るようになった時期
- ・布を織る理由

布を織る理由、という項目に関しては、選択式で回答を促したりせず、会話の中で聞き出すよう留意した。

聞き取りを行った70名の内4名は他民族の村の出身者であった。その内3名は婚姻³により(1975年、1982年および2003年)、もう1名は商人として(1990年)移住してきている。

4. 調査結果

(1) 染織技法の習得年齢

17～68歳の66名(平均44.3歳)への聞き取りから、平均9.4歳から糸を紡ぐようになり、平均13歳から布を織るようになることが分かった⁴。

(2) 布の保有量

平均してひとりあたり128.8チャオ⁵(約515m)の白綿布を保有していることが分かった。これは聞き取りを行った女性ひとりが保有している量であり、その女性が同居する姑や嫁はまた別に保有している。同一世帯内でもお互いにどの程度保有しているかは把握していない場合が多い。

一番少ない人で10チャオ(約40m)、一番多い人で260チャオ(約1040m)の布を保有していた⁶。

(3) 民族衣装から既製服への移り変わり

聞き取りから、1973年頃から徐々に海外から輸入された既製品の服を着るようになったことが分かった(表1)。

表1:民族衣装から既製品への移り変わり

(単位:人)

西暦(年)	'72	'73	'74	'75	'76	'77	'78	'79	'80	'81	'82	'83	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92
既製品を着始めた時期				4				1	5	2				1	1		5	1	8		2
既製品をすでに着ていた時期		1											1				1				
民族衣装をまだ着ていた時期	1				1							3								1	
生まれてから既製品を着ている						1						1	1								
西暦(年)	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11	'12	
既製品を着始めた時期	1		1		1	1		6						2	1	1		1	1	1	
既製品をすでに着ていた時期		1																			
民族衣装をまだ着ていた時期																					
生まれてから既製品を着ている																					

(※記憶なし 6人)

1973年、村を通る主要道路の建設が完了すると共に、郡内に初めて商店が1軒でき、中国の既製品を購入することができるようになった⁷。また1980年には一般人でも隣国タイへの往来が可能となったことから、タイの既製品を個人で売り歩く人が出現した。そして1988年、郡内に初めて市場ができたのである⁸。

村人は白綿布で作った民族衣装を普段着としていたが、1973年に既製品が身近に出回るようになって以降、各家庭の経済状況によって徐々に既製品の購入が進んでいき⁹、現在では誰もが既製品を着るようになってきている¹⁰。近年でも白綿布で作った民族衣装を着る女性が僅かにいるが、寒い時期に防寒着として着られているだけで、日常的には着られていない¹¹。また現在、村内において白綿布を用いた民族衣装の生産は全く行われていない。しかし、市場で売られている外国産の服地を使った民族衣装の生産は行われており、村の行事や結婚式といった特別な日や公の場での正装としてのみ着られている。

一方、寝具、頭布、おんぶ紐などは市場で購入できるにも関わらず、依然として白綿布を用いて作られている。

さらにこの白綿布は、生活用品として以上に、死者を弔うための布や嫁入り道具として重要な役割を担うものであることが聞き取りによって分かった。

(4) 白綿布を織る理由

布を織る理由、という質問に対する返答を、多い順に表にまとめた(表2)。

表2:白綿布を織る理由

理由	回答数
① 葬儀準備	52
② 悪口を恐れて	22
③ 子孫に残すため	10
④ 嫁入り準備	9
⑤ 皆がそうしているから・ためるものだから	9
⑤ 買わなくても自分で作れるものだから	8
⑤ 日常生活で必要だから	7
⑤ 市場の既製品より質が良いから	6

(複数回答)

① 葬儀準備

表2を見てみると、多くの女性が「葬儀準備」のために白綿布を織っていることが分かる。

タイドン族の村では家族の中で死者が出た場合、約40～100チャオ（約160～400m）の白綿布を使用する。これは死者ひとりに対して使用する量である為、家族の死に備え、常に大量の白綿布を保有しておかなくてはならない。

葬儀ではまず、遺体に白綿布を何重にも巻く¹²。そして参列者に白綿布を0.5チャオ（約2m）ずつ切り分け配るのである。葬儀には同一民族の村である近隣3村から親類や同じ氏族の家長が訪れる為、大量の布が必要となる¹³。

そして、残った白綿布のすべてを棺桶のそばに積み上げるのである。これには積み上げた布を参列者に披露するという意味があるのだが、参列者はそこに積み上げられた布の量を見て故人を評価するのである。表2の2番目に多い「悪口を恐れて」という理由はここからくるものである。

② 悪口を恐れて

村人は、白綿布の保有量が多い人は、勤勉で真面目な素晴らしい人間だという考えを持っており、反対に保有量が少ない人は、怠け者で頭の悪い駄目な人間だと判断されてしまう¹⁴。そして、葬儀に集まった人々にその場で悪口を言われるのである。また、布を売る行為は自らの身を切り売りするのと同じくらいに愚かな行為とされ、村人から軽蔑されてしまう。

男性が亡くなった場合は、その母や妻が評価の対象となり、女性が亡くなっ

た場合は、その女性自身が評価される。

女性は生きていた間だけでなく、自分の死後にまで村人から悪口を言われることを恐れ、葬儀でたくさんの布を披露するべくせっせと布を織りためるのである。

③ 子孫に残すため

「子孫に残すため」というのは、子孫が葬儀や嫁入りで恥をかかないように、財産である白綿布を残す、という意味を持つ。また自分の死後、子孫に自分を思い出してもらおうためのものでもある。

当然であるが、人が亡くなると記憶の中でしかその人のことを思い出すことはできない。残された家族が、あたかもそこに故人がいるかのように、白綿布を触り、見つめ、そして涙を流す大人達を筆者はこれまで何度も目にしてきた。タイドン族にとっての白綿布は故人の形見というより分身のようなものである。

また、前述にある葬儀の際に参列者に配られる白綿布は、故人を偲ぶものであり、擦り切れて使えなくなるまで使われる。そして使う度に、故人の存在をそこに見るのである。白綿布は単なる白い布であるが、タイドン族にとっては、統計や数値では表せないが、とても意味深い大切な布なのである。

④ 嫁入り準備

親は娘を嫁に出す際に、嫁入り道具として白綿布（約 20～100 チャオ）を持たせる。持たせる量はその時の母親の保有する布の量による。この場合も、嫁の母親がどれだけ勤勉であるかははかられ、少ないと悪口を言われ、娘は恥をかいたのである。

また、嫁入りには白綿布だけを持っていくのではなく、枕、シーツ、掛布団、蚊帳、他に 5～11 枚程の敷布団が必要であり、それらは全て白綿布を使って作られる¹⁵。そのため、娘をたくさん持つ女性は大量の白綿布を準備しなくてはならない。

またこれらの嫁入り道具は、結婚を親との決別とするタイドン族にとって、親が子に最後に持たせる、新しい未来を築くためのはじまりの布（財産）でもある。結婚式の際には、村で敬われている長老グループの男性達が集まり、『二人で力を合わせて、お金と白綿布を集めて生きていきなさい』と諭すことから、白綿

布はタイドン族の文化や思想と関わりが深く、大変重要な存在であることがうかがえる¹⁶。

⑤ 生活における必然性

表2の下方4つの理由から、タイドン族の女性が布を日々織りためることは、皆がそうしているから、ためるものだからと特段何の疑問を持つこともなく、必然のこととして行われていることが分かる。

また、布を購入するという概念はなく、生活に必要なだから自分たちの手で作るというシンプルな考えのもと布を織っている。既製品の布よりも手紡ぎの綿糸で織った布の方が質が良いという認識も、極当然のこととしてある。

筆者が聞き取り調査や村人と日常生活を共に過ごす中で、村人が白綿布を「伝統の布」と言い表わすことも、布を織ることに対して「伝統である」と言い表わすことも、一度も耳にすることはなかった。白綿布の存在自体が生活に密着した当たり前のものであり、伝統的なものとしては全く認識されていないのであろう。

5. まとめ

本調査により、タイドン族にとって白綿布は、葬儀や嫁入りなど生活の中で欠かせない重要な布であることが分かった。また、織り手自身や家族が悪く言われないため、恥をかかないために、幼い頃から大量に織りためなければならない布であることも分かった。

これは、調査地であるこの村が、村社会という閉鎖的であり、村人同士の監視が行き届いた小さな民族集団であるため、他人からの評価や世間体、人間関係を重要視するという暮らしがあり、現在まで連綿と織り続けられているものと考えられる。さらには、社会環境の閉鎖性がもたらす「恥」という概念が根底に存在する文化の中であるからこそ、白綿布が存在し続けていると言えるだろう。

また、白綿布は村人にとって重要な布であると同時に、単に生活に必要な布でしかない。伝統であることに気づかず、極当然のように布生産が行われている中にこそ、本来の伝統織物が存在するのであろう。

伝統であるというのは、その文化圏外の他者が認識してはじめて気づくもので

あり、さらには当事者自身が自発的に伝統を意識した時点で、伝統織物ではなくなるのではないだろうか。伝統織物とはそれを継承し続ける人達にとっては日常の何気ない布であり、それが他地域・他民族から見て特別な布に見えるだけのものなのかもしれない。

そして伝統というものは常に変化していくものである。タイドン族の日常着が民族衣装から既製服へと変わったように、新しいものを容認する動きが広まると、それが当然のこととなり、世代を超えて新しい伝統へと、日常へと変わっていく。伝統とは元来、そういった変化自在で不安定なものである。

今回は布の保有量にのみ焦点をあてたが、その質もまた大切であり重要視される。彼女達は布をためるためだけに単に織るのではなく、美しい（細く紡がれた糸で布目がきれいに揃った）布を織る努力を惜しまない。それは家族に美しいものを持たせたいという思いと、自分の見栄のためである。布は日用品であることから必然的に他の村人の目に触れることとなる。そして村では常に出来栄え競争が存在し、それぞれの布は作り手本人がいなくてこそコソコソと評されるのである。

これは布に限らず、男性の仕事である籠作りや道具作り、鉋作りなども同様である。そういう状況下で作られているものは、手仕事であっても販売を目的とした大量生産の中で作られているものとは別格の美しさを放っている。

筆者はそういった手仕事の丁寧さや美しさを何度も目にしてきた。その度に「譲って頂けないか」と作り手に伝える。すると大概「これは家族のために作ったもので、手放すことはできない」と言われるのである。

本来のものづくりの姿とは、作り手により使い手（家族）に「少しでも良質のものを」と思う心から作られ、使い手のことを想いながら作られるものであろう。そのような作り手の思いこそがもっとも美しいものを生み出す原動力であり、伝統を紡いできたのではないだろうか。

2017年現在、タイドン族の村では自家消費のための布生産が行われつつも、販売を目的とした布生産が一部で行われるようになっている。また、白綿布や工

業綿糸の購入、嫁入り道具の持ち寄りなど、家庭によってかなりの変化が見られる。

今後、現在と2012年当時との布文化を取り巻く状況を比較することにより、より深く、伝統織物とは何なのかを探っていきたい。

註

- 1 生成りの綿布(幅約36～40cm)。他のタイ系民族においてもこの白綿布を重要な布とする文化がある。しかし、これまで筆者が見てきたタイ系民族の村々では、市場で売られているタイ系民族用の白綿布(工業系による機械織)を使用していたり、祖先の残した布を繰り返し使用しているか、織ってはいても市場で購入した工業系を使用している場合がほとんどである。もしくは白綿布の文化が廃れて使用されていない。
- 2 筆者がはじめてこの村を訪ねたのは2006年であるが、2009年になり、村人6名が県の地方発展支援金を受け、小規模ではあるものの布の生産販売を始めた。それに伴い極僅かではあるが、村でその6名に対し、自家生産した手紡ぎ綿糸を売る人が現れた。筆者は村の布生産の状況が大きく変わることを予想し、2012年に現状調査を行うことにした。
- 3 1975年に初めて他民族との婚姻関係が結ばれるまでは、養子縁組によって他の民族の血は混ざりながらも、婚姻関係による民族間の交流はなかった。2012年の時点においてもほとんど同一民族以外の婚姻は行われていなかった。しかしこの調査以降、村の中学校から多民族の学生が通う郡都の高校への進学率が向上したことにより、村外の異性と知り合う機会が増え、他民族との婚姻が増加している。
- 4 村外から来た女性4名のうち3名は、移住するまで布生産をしたことのない女性であり、もう1名は移住するまでに出身の村で学んでおり、調査対象地と異なる環境での習得年齢である。そのためこの4名を除外した。
- 5 チャオとはタイドン族が布を数える際に用いる単位であり、1チャオは約4mである。長さは人により多少異なるため正確な長さは不明。
- 6 保有量の少ない女性は、結婚や葬儀、娘を嫁に出した後であることを理由としてあげていた。
- 7 中国製品のみを扱う商店であった。
- 8 ラオスでは1975年に王国から社会主義国家への革命が起き、内戦が終結した。それをきっかけとし、人の移動が起こると同時に物流が生じた。1986年には市場経済の導入がはじまり、さらに海外からの輸入が増え、既製品に触れる機会が多くなった。
- 9 1973年までも阿片の栽培・加工や転売などによって銀貨や紙幣を手にしてしたが、郡内に商店はなく、金銭を使い物品を購入するという行為が日常的に行われてこなかった。ただ、阿片の売人などは隣国へ出向く機会もあり、そういった極一部の人は既製服を着ることもあったようである。
- 10 女性の下衣は外国の既製品ではなく、ラオスに暮らす他民族のシン(筒状巻きスカート)が履かれている。タイドン族の女性の民族衣装もシンであるが、藍一色の地味なものであった。それに対し他民族のシンは多色の模様が織り込まれている。村で初めて他民族のシンを履く者が現れた際、村中から「もうタイドン族ではない。他の民族になった」と非難された。しかしそのシンがタイドン族のものよりも華やかであったため、憧れて履く人が徐々に増えていき、それに伴い、非難する人が減っていった。そして現在ではすべての女性が他民族のシンを履いている。

- 11 タイドン族は自分の親が亡くなった際に、白綿布で作った白い服を着る。それは2017年現在でも着られている。
- 12 初めに巻かれる白綿布が故人の母親の布であることや、故人との関係性に従って持ち寄られる白綿布もあるため、すべてが故人の布ではない。
- 13 白綿布が少ない場合は、親類が布を少しずつ持ち寄ることで助け合う。
- 14 聞き取り調査中、筆者が各家を訪ねていることを知っているため、村人を名指しし、その人が白綿布をどれだけ持っているのか、あの人は怠け者だから少ないのではないか、などの質問を受けることが度々あった。
- 15 2012年当時、蚊帳だけは市場で購入していた。
- 16 白綿布は精霊や呪術師、葬儀で棺桶を担ぐ役目の人などに対し、お礼に渡すお金の代わりとしても使われる。また、これまでも近隣民族との物々交換の品や労働の対価として、布や布団などが使われてきた。

